

Title	17 後生畏るべし、先生も畏るべし？
Author(s)	熊谷, 謙介, Kumagai, Kensuke
Citation	学問への誘い - 大学で何を学ぶか - , 2014: 73-77
Date	2013-12-25
Type	Learning Material
Rights	publisher

後生畏るべし、先生も畏るべし？

熊谷謙介

あなたにとって理想の「先生」とはどんな先生ですか——、このように聞かれたあなたは、高校までの担任の先生や部活の顧問などを次々に思いおこしては、甘酸っぱい記憶がよみがえったり、もしかしたら嫌なことを思い出したりするかもしれません。今、大学に入ったあなたは新たな先生との出会いを期待していると、先生の一人である私も期待しているのですが、果たして、理想の先生などというものは大学に存在するのでしょうか？

高校までの先生とは異なり、「教授」などと呼ばれることもある大学の先生には近づきにくいイメージがあるかもしれません。たしかに、かつては（今でも？）大学の先生と学生との関係は「師弟のまじわり」と言われていました。師匠と弟子と呼ばれるような関係は、

今ではお笑いや演歌の世界にしか残っていない、いわば芸事の世界だけに残る古びたものかもしれません。

それでもここで私があなたに話したいのは、私にはどうしても「師匠」としか呼べないような先生についてです。学生とフレンドリーな関係を築くこともなければ、研究以外のプライベートな話もしない、このような先生について、あなたはどう思いますか？

*

私はフランス文学を研究しているのですが、大学院生は実際にフランスに行って、フランスの大学で論文を書くことが求められていました。そこで留学前に、マルメという詩人の研究の世界的権威であるベルトラン・マルシャル先生に手紙を書いて、指導教官になってもらうようお願いし、了承してもらいました。今ではメールも使われるようですが、その頃は正式なオファーは手紙で行うというのが暗黙の了解だったのです。

そして初めての授業です。前の席に座っていたカップルらしき学生二人にマルシャル先生はどういう先生かと聞くと、声を合わせて「ノン・ストップ！」と言っていました。どういうことかは授業を受けてすぐに分かりました。詩の具体的な分析をする講義であるに

もかかわらず、何も持って来ず、片足を教壇にある椅子に乗せてよどみなく語り続ける。ときおりポケットに手をつ突っ込んで、中にある小銭をじゃらじゃらいわせるのは癖のようなのですが、詩は空で言えるし、詩人が書いた手紙の文章まですべて暗記しているので、本もノートも持つてくる必要はありません。あつという間に二時間の授業は終わっていました。大学で最初に受けた授業だったので、フランスの先生はみんなこうなのか！とあわてふためいたのですが、幸いと言っているのか、他の先生は講義ノートを見ながら席について授業をする人が一般的でした。

すっかり魅了された私は、留学期間六年間を通じて彼の授業を受け続けると同時に、毎月一回のペースで面会させてもらいました。マルシャル先生が指導する学生たちといっしょに控室で待機して、面会の順番を待つのです。論文の原稿の束を抱えていかにも長い話になりそうな人、待っている順番を抜かしてスルスルと研究室に入っていく要領のいい人——、その中で私は留学生として、論文の内容もさることながらフランス語の問題も抱えています。「文は人なり」と言いますが、文章を読まれて次々に欠点を指摘されるのは本当に辛いことです（あなたもレポートを提出する頃には分かれます）。マルシャル先生

は、外国人のフランス語だからといって特別扱いせず、不自然な表現があればとことんまです指摘してくれました。また論文の内容についても、先生の学説に引きずられがちな私に「あなたのオリジナルなものを出しなさい！」と発破をかけるのでした。また添削すべてにコメントがあるわけではありません。ただ原稿に線だけが引つ張つてあるのを見て、まづいところだったのか、むしろ良かったところなのかを推測するのも一仕事でした。

このような毎月の儀式を続けて、何とか論文を執筆し終えたのですが、マルシャル先生は「少し寝かせなさい。時間がたてば見えてくるミスがある」とのアドバイス。帰国のこともありやきもきしていたのですが、実際、時がたつと一時の熱狂から覚め、細かいミスが次々と発見できたのでした。そしてとうとう論文審査の日。論文審査とは、大講堂で指導教官をはじめとする審査団の質問に約三時間受け答えするという過酷なものです。今までさまざまな指摘を受けてきて不安だったのですが、最後の最後に幾分かほめていただいた言葉は今でも覚えています。

*

さて、このようなマルシャル先生についてどのように思いましたか？ 日本とフランス

は違う、大学生と大学院生は違うなど、いろいろな意見があるでしょう。学生と同じ高さの視線でコミュニケーションをし、授業外の面白い話もできて、たまにごちそうもしてくれる友達感覚の先生が人気なのは、それはそれで理由のあることです。それでも、私はマルシャル先生からは本場に「教育を受けた」気がしてなりません。論文を添削し、厳しい助言を与えるのは、学生に対して責任を負わなければできないことなのではないでしょうか。そして学生の未熟な部分（私にとっては特にフランス語）について妥協せず指摘することは、一人の研究者として扱っている、つまり半人前の学生だから仕方がないという考えをとらないからなのではないでしょうか。

少なくとも私は、このような教育を与える先生に一步でも近づきたいと考えています。そしてあなたも、あなたが理想と考える先生と出会えるよう、願うだけでなく積極的に動いてみてください。先生はやってくるのではなく、自分で探し求めるものなのですから。